

バングラデシュ見聞記

小川 裕子

バングラデシュの首都ダッカの空港についた。むっとする熱気と、空港の中でさえ向こう側がかすんで見えるほどの埃。空港の外にはたくさんの人が押し寄せていて、出てくる客の荷物を運んで日銭をかせようと待ちかまえている。小さな手を差し出してお金をせがむ子供もいた。バングラデシュに着いてうれしい気持ちと、手を差し出してくる子供の目に胸がつまる思いと、両方の気持ちをかかえながらダッカ市内に入った。

バングラデシュはインドの東側に位置する。南側はベングル湾に面し、他の三方をインドに囲まれている。国土の大半はガンジス川とブラマプトラ川、ジャムナ川という三つの大河の河口部にあり、面積は一四・四万平方キロで北海道の約二倍の広さである。全面積の八〇％は海拔九メートル以下の低地で、三ヶ月の突風雨と十ヶ月のサイクロンは洪水などの大きな自然災害をもた

らすこともあり、雨季には国土の三分の一が水没してしまふ。私たちが訪れた時期は乾季だったので、水はそれほど多くなかった。また、バングラデシュではコメが一年に三回収穫でき、金色の稲穂が実る田の隣りでは一〇センチほどの苗が青々としている、という光景を見ることができた。

バングラデシュの国民は九八％がベングル人で、また八五％がイスラム教徒である。一九四七年に英領インドからパキスタンの一部として独立し、一九七一年にパキスタンからバングラデシュとして独立した。しかしこれといった産業もなく、国家予算の約半分は外国からの援助で占められている。高い人口増加率や自然災害などによって穀物が慢性的に不足しており、人びとはとても苦しい生活を強いられている。

世界で最も貧しい国といわれているバングラデシュは、様々な形で外国からの援助を受けている。日本のいくつかのNGOもバングラデシュで援助活動をしている。NGOはNon-Governmental Organizationの略で、一般に「非政府組織」と訳される、民間の援助団体のことである。これはよくODA（政府開発援助）と対比して使われる。NGOの独自の役割として、①開発におけ

る矛盾を発見し、告発する、②開発矛盾の犠牲者・社会的弱者の意見を代弁する、③国家にできない開発サービスを提供する、という三つがあげられる。その他、自然災害が起こった際に現地に行き、食料や日用品を届けたりするなどの緊急支援をすることもある。また、政府の援助の手が届かない、細かい部分のフォローをする役割もある。

バングラデシュで活動する日本のNGOのひとつにシャプラニールという団体がある。今回、私はこの団体のステディツアーに参加した。ツアーの目的は、実際に現地に行つて援助活動を見学すること。参加者は、関西在住の一人とシャプラニールのスタッフの計二人だった。年齢は、一九才から上は七十一才（！）までと幅広く集まった。参加費用は約二〇万円で、アルバイトをして貯めた。

シャプラニールは、一九七二年にできた民間の海外協力団体で、バングラデシュとネパールで援助活動を行っている。バングラデシュでは日本人スタッフ二人と、三〇〇人のバングラデシュ人スタッフが活動している。目的は「農民の自立」を支援すること。農民たちが自発的

に集まってつくる「シヨミティ」というグループをひとつの単位として支援している。一グループは二〇人ほどで構成されていて、メンバーは村の小さな小屋で週一回の会合を開く。生活上の問題について話し合い、互いに助け合うことから活動をはじめめる。会合にはシャプラニールの現地人スタッフが参加して、どうしてもっと生活がよくなるかを一緒に考える。あくまで村の人が中心になって活動し、スタッフはそれにアドバイスをするというかたちで支援している。具体的には、自分たちで定期的に貯金を積み立て緊急時に備えるとともに、そのお金を元に牛を買ったり共同で土地を借りるなどの収入向上事業などを行っている。

また、バングラデシュの識字率は三八・一％と低い。自分の名前さえ書けない人がたくさんいる。そんな人たちのための識字学級も開かれていて、これは週に六日、一回二時間の授業が半年間続くというものである。女性の授業は昼間、忙しい仕事の合間をぬって行われ、男性の方は毎日の仕事が終わってから始まる。それにもかかわらず、脱落する人はほとんどいない。それだけ切実に文字を書けるようになりたいと思っている。

しかし、シャプラニールの活動に問題がまったくないというわけではなく、いやになってシヨミティをやめる



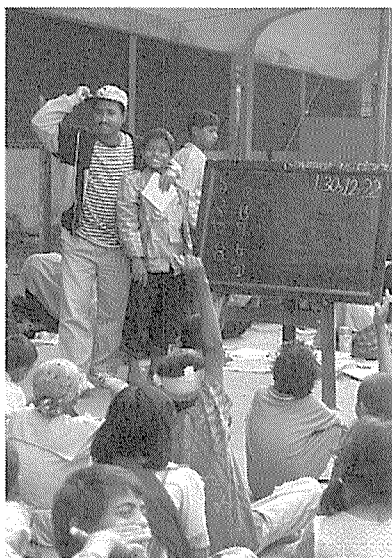
女性ショミティの識字学級

村人もいれば、集めたお金を自分のものにしてしまう人もいる。ダッカ事務所長の筒井さんは「スタッフのなかでも意見が対立したり、日本人の提案することがなかなか理解してもらえなかったりする」と話していた。

街を少し離れると、とにかく緑が多い。一面に田や畑がある。狭い道路の両脇にうっそうと繁る木々の葉がまるでトンネルのようで、風にゆれる木もれ日が気持ちいい。田を耕すために牛を飼っているところも多く、道端では牛が草を食べていたりする。ヤギも多い。にわとりが放し飼いにされていてあたりを走り回っているような、なんともどかな風景だった。

村の人たちは数軒にひとつ井戸を掘り、共同で使っている。家の壁はジュートの芯を使っているところが多いが、土の壁の家もある。屋根は萱葺きが多いが、トタンを使っている家もある。日本のようにガス台はないから、料理は土のかまどで作る。

女性はサリーを身にまとい、男性はTシャツにサロン（腰巻き布）というかっこうである。はだして歩いている人もいる。道を歩いていると自然と人が集まってきて、「何歳だ?」「結婚しているのか?」などと質問してくる。



現地の NGO が主催する駅の青空教室で学ぶストリート・チルドレン

結婚については数え切れないくらい何回も聞かれた。彼らにとって、私たちがベンガル語をほとんど知らないということは関係ないようだ。ショミティなど見学に行くと、見学に行っているはずの私たちが逆に見学されている気分になるほど注目を浴びた。とにかく好奇心のかたまりのような人たちだった。

今回の旅行で一番印象的だったのは、ダッカのストリート・チルドレンである。都市には農村から出てきた子供たちや、親に捨てられた子供たちがたくさんいる。

彼らは仲間といるときは明るい表情をしているが、荷物運びなどしている時の顔は別人のようで、厳しい表情が彼らの胸のうちを表しているようだった。ストリート・チルドレンに対しては、多くの NGO が援助活動を行っているが、まだたくさんの子供たちが援助を受けられずに路上で生活している。それでも力強く生きている彼らにとっても心を動かされた。

短い時間ではあったが、バングラデシュを訪れて日本とはいろいろな面で異なるところを見た。バングラデシュは物質的には決して豊かとはいえない。しかし「生きる」ということに真剣に向き合っている人々の姿にいたるところで出会った。「私は生きているのか？」と自分自身を振り返ると、心もとない。この旅では援助活動の見学もさることながら、自分自身を問うという点で非常に勉強になった。たくさんの人にも出会うことができたし、多くのものを得ることができた。いろいろなハプニングもあったが、それもいい思い出である。バングラデシュに行ってほんとうによかったと思う。

【参考】

シャプラニールのホームページ：

<http://www.shaplaneer.org/>